

# 必要な情報を選べる子どもを育てるために

東京都墨田区立第四吾嬬小学校

宮脇 康一

## 1 メディアは悪者か

わたしたちは多くの情報とその媒体（メディア）に囲まれて生活している。テレビ・新聞に代表されるマスメディアとそれらが伝える情報はもちろん、インターネットや携帯電話の利用は誰しもが思い浮かべるものであろう。しかし、それだけに限らず、わたしたちの身の回りには実に多くの情報がある。例えば、町を歩けばさまざまな看板が目に入り、道を走る車には会社のロゴがついている。電車に乗れば中吊り広告がある。

これらのメディアの発達が読書離れの一因であるという意見がある。確かに一理あるかもしれない。かといってメディアを悪者扱いにし、利用の制限をさせれば読書離れに歯止めがかかるかというところ、そうではないように思う。すでにこれらのメディアは生活の一部となっており、現実的でもない。また、これ

から生きる子どもたちにとっては、それらの利用は必然である。そこで、メディアの利用を前提として、本から必要な情報を取り出すために読書する子どもを育てるための方法を考えたい。

## 2 メディアの利用を教える

逆説的であるが、本を利用して情報を得る子どもを育てる有効な方法の一つは、前述のメディアの特性と利用方法を教えることである。

テレビは映像と音声とを同時に伝えられ、即時性がある。しかし、情報は流れてしまえば見直すことが難しく、必要な情報が常に流れているとは限らない。新聞も即時性がある上に多くの情報が詳しく書かれており、さらに読み返すことができる。しかし、過去の情報を得ることはできない。インターネット上には多くの、そして最新の情報があり、必要な

ときに見ることが出来る。また、だれでも情報の送り手になることができる。その反面、真偽の不明な情報も多く、慣れていないと必要な情報を見つけ出すことが難しい。

このようにそれぞれのメディアには、人間でいうところの得手不得手がある。それはメディアの特性といえるものである。これらのメディアでは探しにくい情報が、本から得られることがわかれば、本の価値に気付き、利用が高まると考えられる。

## 3 本もメディアの一つと教える

本には、多くの良い特性がある。専門家が書いていることが多いために、その情報の信頼性が高いこと。一定の情報が一続きにまとまっており、必要に応じて何度も読み返すことができること。また、同種の本を並べて読むことで情報に深みや広がりが見られること。図書館では十進分類法により順序よく並べられ、検索もしやすいことなど、この他にも多くの良い特性があることは、皆さんも御存じの通りである。

かといって本が万能だということはない。テレビのように動きや音を伝えることはできないし、新聞のような即時性もない。インターネットのようにだれもが発信できるわけではないし、本文のキーワード検索もでき

ない。

本に特性があることから、情報を伝える媒体という点からも、本も一つのメディアだといえる。他のメディアと同列に考える必要がある。本も他のメディアと同様であると教えることが、適切な利用につながるのである。

#### 4 複数のメディアの利用を教える

わたしたちが本に情報を求めるときには、一冊だけではなく、複数冊を用いることが多い。それは、一冊では求める情報が十分得られなかったり、著者や出版時期の違いによって情報が異なる可能性があったりするからである。また、ある本にはなかった情報が別の本でわかることがあるからである。

他のメディアを用いて情報を求める場合も同様である。テレビで見た情報を翌日の新聞でくわしく知ろうとすることは一般的である。人から聞いた話をインターネットで調べて確かめるという行動も珍しくはない。それぞれで得られる情報が異なったり、精度に違いがあるからである。

本と他のメディアを併用する場合もまた同じことが言える。専門家の書いた百科事典と複数の人が書き加えたインターネット上のウィキペディアとは、得られる情報が異なることが普通である。インターネットでは情

報を得られなかったが、本では情報を得られることもある。その逆も、もちろんあるだろう。

このような活動を繰り返すことによって、安易にインターネットのみに頼るのではなく、求める情報を得るためには本も含めたメディアをどの程度用いることが必要なのか、体験的な理解が深まるであろう。

また、複数のメディアから情報を得ると、どの情報が求めているものなのか、どちらの情報がより正確なのかなどを判断する必要が生じ、結果的に情報の取捨選択能力の育成につながると思われる。その上、必要な情報を組み合わせて利用する能力の育成にもつながると考えられる。

このように、他メディアの利用は、結果的に必要な情報を本からも取り出すことが重要であると教えることにつながるのである。

#### 5 本の使い方を教える意味

ここまで、見出しに「教える」という表現を用いてきた。読書に親しむ態度を養う点で違和感を抱く向きもあるかもしれない。確かに、必要な情報を本から取り出すことが自然にできるようになることが理想的だが、現在本を読む習慣をもたない子どもにはあまり期待できないであろう。自然に身につくことを

待っていては、結局、本の良さを知らないままの子どもを増やすだけではないかと危惧する。本から情報を取り出せるようになるためには、その方法を具体的に教えることが重要である。それも、手順を教えるだけではなく、実際に本を扱うことによって体験的な理解をさせなければならぬと考えている。

#### 6 本を含めたメディアとの

#### つきあい方を考えさせる

冒頭に述べたように、本以外のメディアも利用することで、本の良さを認識できたり魅力が引き立ったりすると思う。要は、それぞれのメディアの特性を理解した上で、情報のとらえ方と取り入れ方、距離の取り方と生かし方がわかることが重要である。本も含めて、メディアとのつきあい方を考え、自発的に行動できるようにすることが、必要な情報を本からも取り出す能力を身につけさせることになるかと主張したい。

みやわき こういち 東京都墨田区立第四吾嬬小学校  
主任教諭 文脈によって伝わることに興味をもち、実践を考えています。